小池辰雄著作集　第３巻『無の神学』

第二部　無の神学への道

第四章　無教会神学論

（三）無教会の神学

（a）「神学する」ということ

# 【目次】

●福音の場　　●神からの呼びかけ　　●神の根源語　　●神学の創造性　　●神学と実存

# ●福音の場

無教会にとって神学への必然性が叙上の如くであるとするならば、我々はいかに神学すべきであろうか。「神学する」とはどういうことであろうか。少なくとも「神学する」ということを私はどう解するかを先ず述ぶべきであろう。それはやがて無教会神学の根源性格に関わるものでなければならない。

普通神学するというと、何か難しいこと、信仰には余計なこと、或は信仰を妨げるもの、硬化させるもののように思う人があるであろう。神学という学が思惟のいとなみである限り、それは難しい面を有するは当然である。さしあたりここに神学するというのは、思惟の論理的体系としての神学を形成するというのではなく、神学的思惟そのものがどういうものであるかを先ず問題としているのである。

我々が福音の真理について考えるとき、その立場はどういうものであろうか。我々は福音というものをある任意な立場を自ら選定して、たとえば、文学的な立場とか、心理学的な立場とか、哲学的な立場とかいうような立場から、考えることが出来るであろうか。なるほどそれはある意味で可能であるが、そのときは福音は最早福音としての本来の意味を隠してしまうことになる。福音が我々にとって存在の根源的な限定である限り、福音について考えるとき、我々のとらしめられる立場はやはり福者の場の外にはあり得ない。非根源的な何か他の場から福音を考えるということは、我々の存在の根源を観的に問うことになり、それは我々自身に対する自己矛盾であり、虚構となる。それは福音を福音として考える立場ではなくなるのである。

それ故に福音を考えることは、我れに対して一切の仮定的な、自己選択的な立場をゆるさぬことになる。もしそうすれば、それは福音をも自己をも対象化し抽象化することになり、かかる思惟は我々にとって福音に対して本質的根源的たり得ない。それ故に福音について考えることは、信仰者たる自己を抜け出てはなし得ない。たとえば福音を哲学的に思惟することは宗教哲学であっても神学ではない。どんなに神のことが論ぜられてもそれは神学ではない。神学することでもない。信仰者たる自己を抜け出ないということは、私が信仰者たることを自ら肯定し得る自信の如きものから言うのではない。信仰というどん底に追いつめられた者、福音という力に砕かれた者、然りまた追いつめられつつある者、砕かれつつある者、というより外のものではない。追いつめられても、追いつめきられ得ず、砕かれても砕かれきれ得ない者という立揚、

「信仰なき我をあわれみ給え」

という我の側の徹底的危機の場が私の言う終末的実存者の現実面の重要な性格の一であって、信仰の惨憺たる我れなのである、かかる者のやむにやまれぬ福音の中からの思惟が即ち神学するということなのである！

かくの如くして、福音の中からのどん底者の、惨憺たる思惟が、いかに浮きたる思惟に非ず、思いつきの信仰的思惟に非ざるかを知るであろう。テオロゴス（神学）は神からの論理展開であって、人間からの思惟ではない。Theologisches Denken（神学的思惟）、 theologisieren（神学する）といわれるものは、論理そのものが人間の思惟のいとなみである限り、哲学的要素を有つことを一つも妨げないのみか、多いに哲学的思惟が用いられるのであるが、論理の根拠と内実とその展開契機において正に神学的と呼ばれる要素を有っているのである。

それ故に福音の場を離れて神学するということはあり得ない。そして重要なることはこの福音の場が何を意味するかなのである。ここにおそらく、教会の神学と無教会の神学の岐路が横たわっている。その重要問題に立ち入るに先だって、なお神学する信仰者という主体の面の分析を行ってみよう。

# ●祈り

信仰というからにはそこに信仰されている対象があるわけである。我々において、信仰の対象は、の頭でもなく、偉大なる人物でもなく、人間のつくり出だしたる一切の偶像ではない。すべての形容詞が限定することの出来ない神と呼ばれる唯一者、絶対者、実在者である。

そこで信仰の表現は何よりもまず、この生ける実在者への言、祈りでなければならない。祈りは第一に実在者からの語りかけ、呼びかけを前提とする。この前提は啓示史的根拠によるものである。そのことには後に触れる。祈りなき者は絶対に信仰者ではない。この間の深い消息については、聖書の『詩篇』は言わずもがな、アウグスティヌスの『告白』を読みし者のひとしく知るところである。神との親しき対話たる祈りこそは信仰者の、どん底性を有つ人間の根源的な言である。魂の息吹である。

祈りは言ではあっても、全人格を神に投げかけて語るという全人格的霊的表現である以上、それは実存的内的行為といわれるべきである。かく信仰はただ神を信ずるということではなく、そういった神を対象的に信ずることは悪魔でもやるのであるが、そういうことではなく、信仰するというのは、深く全人的霊的行為的であって、心理的な一つの状態ではないことに注意しなければならない。信仰を強調したパウロもルッターも単に瞑想思索をしたのではなく、よく祈った。祈りはディアロゴス（対話）であって、そこに瞑想思索の面とは異なる別な思索を生み出だす重要な契機がふくまれている。パウロもルッターもその祈りが真に全人格的な行為的なものであったが故に、必然彼らは行動的であった。それ故に信仰と行為の媒介契機が実に祈りにあることを知らなければならない。ここにおいても祈りを通していかに神の力が我らにはたらきかかるかを知る。神の力の来らざるところに断じて真の行為は出て来ない。かくして信仰者は祈ることにおいて霊的内的行為者である。

次に信仰者が、追いつめられた者（端的にかく表現して置く）の根源的な在り方である以上、神との交りたる祈りを根源動力として、対自的行為と、対他的行為との二面にはたらく。いかにそれが惨めなあらわれ方をなすとも。それは他人への行為として、──端的にその極限概念を以て表現すれば──伝道（宣教）としてまた愛の実践としてあらわれ出る。自己への行為としては、或は自己との内面的な戦となり、自己の才能の実現としての仕事に発展し、或いは福音を深く考えるという思索となる。かく祈りに基づいて思索するところ、聖霊のはたらきのもとに祈りが対自的に反映し、主体的に自覚され、創造的展開をなすところに神学的思惟、即ち神学することが生ずるのである。

# ●神からの呼びかけ

さて事態を啓示の根源にって考えなければならない。人間は何らかの相において宗教的経験をなす可能性を有っている。そして祈りという宗教現象はある意味で普遍的なものであろう。しかしながら、自らをイスラエルに啓示した神、イスラエルにとっては唯一の神、イスラエルがその神をのみ拝すべく命ぜられた拝一神的唯一神、であった神とイスラエルの関係は、極めて人格的な絶対性を有った関係で、イスラエルは先ず神から、民族的人格神として問われ、呼びかけられた。イスラエル民族こそ正に神から実存共同体として呼びかけられたのである。そのことは同時にそれを構成する個々人が神から人格的に呼びかけられたことである。族長時代のその種族と族長との関係は、共同体と個体の自覚以前の共同体即個体の関係である。そこに却って族長の神に対する素朴な自意識、責任感があったと思われる。やがてそれは時代が降って、

「聴けイスラエルよ、我らの神ヤハウェーは唯一のヤハウェーなり。汝心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして汝の神ヤハウェーを愛すべし」（申命記6･4）

という極めてひたむきなる神への応答として民族共同体即個体に要求される。具体的に歴史にきり込み、その行動を以てエジプトよりイスラエルを選び出だし、引き出だし、その十言（Dekalog）を以て（勿論かの「十誡」の通りではなかろうが）モーセを通して要求し給うた神への人格的応答が、即ちこの「聴け、イスラエル」に約言されている。

# ●啓示の時間的空間的具体性

イスラエルに対して拝一神の要求をなし給うた啓示の道を通して、やがて人類全体に拝一神を要求して居られるのが我らの神なのである。どこまでも世界観的観念的な意味の唯一神、絶対神に意味の重点を置かしめないということを強く、深く自覚しなければならない。啓示神学は正にこの点を一歩も譲ってはならないのである。第二イザヤに至れば、神ヤハウェーは明かに独一なる神として自覚され、更にそれをも超えて唯一絶対的なる神として把握されている。しかし、それはどこまでも観的に想われたる神ではなく、実存的に現じ出でたる唯一性であり、絶対性である。イスラエルに自らを現わしたる神が一切の比較を絶したる啓示神であることをにイエスにおいて決定的に現わしたるとき、それは大なる「躓きの石」としてその絶対唯一性への信仰を迫る神なのであった。

かかる啓示的具体性、歴史的啓示性を有つこの神に、我々の祈りの可能根拠がある。この神からの呼びかけ、語りかけを、聖書を通して、聖霊のはたらきを通して我々が聴くとき、我々の祈りははじめて真に可能なのである。それ以前の祈りは暗中模索的なるものに過ぎない。

# ●神の根源語

聖書は即ち、かかる神からの語りかけが、啓示的事象において聴かれ、記録に結集されたものである。そして聖書は神霊の導きによって正典と決せられるに至ったものに相違ないのであるが、盛られたる素材は、さきにも触れた如く、どこまでも時間的立体性と、場所的多面性と、それらの素材の筆者や編者の実存の特殊性を深く蔵しているもので、かかる具体性はどこまでも止揚されない潜在性を有つものである。聖書は時間性と空間性を有った具体的な啓示における神の言の書であるが神の言はどこまでも、根源的には隠されたものとして現わされているのである。聖書の正統性を決定したものが信仰者の合議であるとしても、それはどこまでも聖霊のはたらきによるので、聖霊が主導権を握っている。しかもその聖霊は信仰者の不完全性、相対性において働いたのであって、聖霊の意図に拘らず、聖書そのものはあらゆる点において人の惨憺さを担っている。しかもその人間の惨憺さと歴史的具体性をその形式と内容において聖霊が担っておればこそ、啓示であり、神の言であるという、聖書の、相対的限界における絶対的無限界性がある。神の言は、根源語は、或は根源啓示は、絶対に、聖書といういかなる意味でも相対的な枠をはみでている。枠をはみ出ている神の根源啓示なればこそ、惨憺たる枠の中にものすごく現われているのである。それ故にこそ、聖書における神の言の意味は無限の展開性をもっているのである。丁度、人間の構成するエクレシヤが、キリストの体という神の実存共同体である限り、絶対に人間の限定を超える動的な、不可見的具体性を有する如く、聖書も亦、神の根源語──ヘブライ語やギリシヤ語の奥にかくれている神のロゴス──を盛る限り、正典それ自体は人間の惨憺たる書でありながら、正典を通じて神の根源語に、つねに新たに聖霊によって、我々の現実を以てぶつかり得るものである。昨日Ａ１と響いた神の言の意味は今日はＡ２と響かざるをえない。しかも、神の根源語は、そのＡ１、Ａ２の響きの相違によってあやぶまれるものではなく、否、実にその相違を与えつつ、真の同一根源性を悟らしめるものなのである。かかるときに、始めて信仰者は神の根源語の深さを知らしめられる（私のこの根源語理解については塚本虎二先生、斎藤茂氏編輯『キリスト教常識』誌第21号1948年１月、拙論「独乙語新約聖書」参照）。それはあらわれたるヘブライ語でも、ギリシャ語でもない。我々が聖書の主体的把握を主張してやまないのは実にかかる神の側に即せる大主観からである。さればこそ人間の相対面、惨憺性とそれによらねば現われて来ない啓示の砕きというもの、また砕けというものを私は重視するのである。

かくて我らは「神学する」主体たる我のはたらきの内面構造の分析と「神学する」真理対象たる聖書の性格を明かにしたのであるが、かかる啓示性を担った聖書を素材として、福音の場の自覚のもとに福音を思惟することが、神学することである。

如上の所論により福音の場についての問題は既に解明への暗示を与えられているのであるが、福音の場が何であるかは次項において論ずべくここでは触れないでおく。

# ●実存のパトス・ロゴス・エトスの三一的連関

神学するとは福音の場において福音を思惟することである。そこに論理的展開がなされるとき、始めてそれが神学であり、その体系にして始めて神学体系といわれ得るわけである。しかしある神学が体系的であるか否かは、その神学の価値に関わる問題ではなく、性格に関する問題であると思う。

事態この如くであるならば、信仰者は意識的たると無意識的たるとを問わず、とにかく「神学する」ことをいとなんでいるはずである。いかに素朴であろうとも信仰者が聖霊によって思惟することが、端的に言って、神学する胚種的現象であるからである。丁度一般の人間が真理を目ざして真実に考えるとき「哲学する」ことがあると同じように。信仰者の思惟の自覚においては、この「哲学する」ことが「神学する」ことによって担われているというべきであろう。現実の人間はいかなる意味においても単に分離分析された分裂そのものではないはずであるから。矛盾は有るとも分裂ではない。分裂そのものとなったときは人間の破綻である。かくて「神学する」ことは、正に人間のどん底の思惟である。

さて信仰者の祈ることがそのパトス面であるとするなら、祈りの対自的反省と創造の展開面として神学することはそのロゴス面であり、外に向かって生きることはそのエトス面である。かくして信仰者の実存構造が、パトス・ロゴス・エトスの三主要面において成り立つことを知る。そしてそれは分析は出来ても現実には分離することの出来ないことは、知情意三位の人格構造におけると同じである。かくの如く、信仰者の告白（祈ること）と思惟（神学すること）と行為（生きること）がパトス・ロゴス・エトスの三一的関連にあることは充分自覚されねばならない。しかもパトス面即ち祈りが最も根源的なものであることに注目すべきである。

まことに祈祷と神学的思惟と実践（伝道及び愛の行為）とは信仰的実存者の三面であるが、さきにも触れた如く、いずれも行為的であること、動的であることをなお注意しなければならない。観的、冥想的、自足的でないということである。活くる神によって活くる者が動的ならざるを得ないと端的に宣言してもよいであろう。かくて神学するという思惟的行為がいかに動的であるかも見当づいて来たと思う。従来の「神学」という言から受けた固定的、形式的な先入感を無教会者は棄て去って、新らしく突き進まねばならないのである。かくして聖書を研究するということの中に、いかに烈しい神学的意識がはたらかねばならぬかは、さきほど述べた如く聖書の根源啓示、根源語への無限の、また不断の肉迫を我々が現実にいかに要求されているかによって明かである。

# ●神学の創造性

神学することは、かく真剣なる自己への内的思惟の行為であるから、必然自己批判的な面を有ち、信仰者にとっていかに重要な羅針盤となるか測り知れないのである。しかしまた、思惟の展開性において、創造的な面が現われる。創造性を有たない個人も民族も国家も文化的に進展しない如く、創造性を有たない神学的思惟はほんものではない。基督教徒が積極的であり、無限性を有ち、

「外なる人は破るれど内なる人は日々に新たなり」

というところのものは、すなわち、創造性を有っているからなのである。不断に創造し給う神につらなる者は、創造的な若さ（イザヤ40･31）を有つ。基督者は老いても断じて老いぼれぬ永遠の青年であるべきである。無限の思惟をなせ！　歴史を動かすものは思想であり、思想の中最も根源的なものは神学的思想である。しかして福音（聖書）はこれが原動力である。

無教会の聖書釈義に対して、しばしば、主観的であるとの非難を受けるとき、それが神学的顧慮の欠如から来る欠陥に対するものである限り当たっているけれども、そのなる信仰の創造的な営みがおのずからなされていることも力強き事実であって、無教会のいのちがそこにあることを認識せず、そのいのち、枠をはみ出でたる生命をも枠ので測って非難するのであるなら、それは硬化せる神学の立場からのあやまれる非難といわざるを得ないのである。

# ●聖霊の磁場

まことに神学することは、聖霊の磁場における思惟であって、哲学的、科学的思惟とは異なる。とは言え、人間の思惟である限り、哲学的思惟や科学的思惟の論理的操作はいくらでも用いられる。ただ思惟の根拠と対象が啓示という世界にあるが故に、人間の文化の一切の面とクロスせざるを得ないのである。そこに神学的思惟の終末性があることを私は強く主張せざるを得ない。

また神学的思惟は聖霊の磁場における思惟である限り、いのりとの緊張関係にあることはさきにも述べた如くである。そこに神学することそのことの中にパトス面が蔵されていることを感ぜざるを得ない。即ち神学するというロゴス的性格に、私はどうしても深いパトス的根源を、この祈りとの緊張関係の故に考えざるを得ず、また自覚せざるを得ない。そのパトス的なるものが、ロゴス的思惟を深く担っているのでなければならない。それは単に人間的なパトスをいうのではない。神から来る、聖霊のパトスが、我々のいのりのパトスとぶつかり、火花の散るような、或は深く泌み入るようなみ霊の現実に入る。そのような祈りの現実のパトスを神によるパトスといって可いであろう。

さきほど検討した意味において、聖書がこの思索の規範的素材であることは言うまでもない。その意味で聖書をはなれては、神学することも神学も有り得ない。

かくして我々は、神学するということが、信仰者のおのが実存に関わる啓示の世界における根源的思惟であり、いかに積極的なる、動力なる反省と批判の思惟であり、創造的な思惟であるかを略ぼ定位づけ得たと思う。聖書の研究においてのみならず、我らの実存そのものにおいて神学的精神がいかに重要なるものであるかをし得たと思う。

# ●神学と実存

考えるということが万人の根源的な内的な行為である限り、信仰者は神学することなしに有り得ないのである。

「ヤハウェーのを喜びて日も夜もこれを思う」（詩篇第１）

と言い、

「にありて神を思い出で、夜の更くるままに神を深く思わんとき、わがたましいは髄と脂とにてさるる如く飽くことを得」（詩篇第63）

という如く、信仰者が自己のなまの現実において福音を思いまた考えることが、それを深くあやまりなかるべく自覚せんとすることが、そこから限りなく真理に即せんと欲して創造的な思索を努むることが、神学するということなのである。

かかる霊的神学的思惟はいのりより出でていのりに還る。また愛の実存に転じ出でて、真に福音に仕えることの重要な動力契機となる。

例えばソクラテス、スピノザ、カントの如く、真に哲学する人はそこに生きなくては居られぬように、レンブラント、ベートーヴェン、芭蕉の如く、真に芸術する者は、芸術の中にその生を没入する如く、真に神学する者は、福音に生き抜かんと努めざるを得ぬであろう。神のパトスなきところに真誠の神学する心はないからである。信仰の実存者の思惟のいとなみは不断に祈りにおいてその源泉をみ、また不断に実存の行為に砕け込まざるを得ない。このパトス・ロゴス・エトスの不断の相互媒介と相互の担いを自覚するところに霊的神学的精神の真骨頂があるのである。

私は福音を砕けにおいて根源的に把握しないでは居られないのであるが、「砕け」の神学は同時に、神学の砕けという矛盾逆説の性格を有つのである。何となれば神学は自ら神学を砕くことによって不断に創造的思惟であり得るからである。